

徳島文学八号 発刊



徳島文学8号

今年も多くのの方の献身的な努力により、『徳島文学』第八号を刊行することができました。

今号は詩人の清水恵子氏に巻頭を飾っていただきました。さらに歌人の大森静佳氏の短歌と散文、昨年度文学賞を次々受賞し話題になった石澤遥氏など、今注目の書き手に作品を寄稿いただきました。

田丸まひる氏や紀野恵氏、永田愛氏、涼野海音氏、うっかり氏も短歌、俳句で意欲的な作品を寄せられています。また宮月中氏や、高梨花子氏ら若い書き手たちの作品が掲載できたのも嬉しいことです。

一方で阿部あみ氏や久保訓子氏、菊野啓氏、北迫薫氏らベテラン勢も健在です。

今回は花里みつ氏、峯菜実子氏によるイラストや、ミスミヤカ氏のフォトエッセイなど、文章だけではなく新たな試みの作品も紙面を彩っています。『徳島文学』第八号は、徳島県内の主な書店の他、Amazon、徳島文学協会のオンラインストア（BASE）でも購入いただけます。

徳島文学発刊報告会を

開催します（会員限定）

『徳島文学』第八号発刊報告会を開催いたします。

なお本報告会におきまして、会員の高田友季子さんの短編小説集発刊のご報告も併せてさせていただきます。さらに会後半では徳島文学協会のこれまでの活動と現状、将来の展望等を徳島文学協会会長佐々木義登よりご説明申し上げます。多くの会員の皆様にご参加いただけますようお願い申し上げます。

■開催日 八月二十四日（日）十四時

■開催方法 会場+Zoom同時開催
（ハイブリッド開催）

■場所 徳島市シビックセンター
活動室3

■参加費 無料

※事前申込不要ですが、Zoom参加の場合はURLをご案内する必要があるため、事前に事務局までメールにてお申し込みください。

【同時開催】BookBook交換会

あなたの要らない本は、誰かが読みたかった本かもしれません。

「徳島文学八号発刊報告会」にご参加いただく際に、要らなくなった本をお持ちください。

詳細はこちら ▼▼▼



高田友季子さん小説集刊行

『ゼリーのようなくらげ』

徳島文学協会会員、高田友季子さんの小説集『ゼリーのようなくらげ』が、サウダージ・ブックスより刊行された。

<https://www.saudadebooks.com/books>



定価 1900円＋税
B6判変形 ペーパーバック
192ページ



『ゼリーのようなくらげ』刊行記念

トークイベント開催

二〇二〇年六月、サウダージ・ブックスより刊行された小説集『ゼリーのようなくらげ』。その著者である高田友季子さんを迎え、本作の誕生秘話や創作の源に迫るトークイベントを開催します。

地方に暮らす人々の暮らしが、痛みとともに静かに重いものが重いまに描かれる高田友季子作品の魅力、編集を手がけたアサノタカオさん（サウダージ・ブックス）と、徳島文学協会会長佐々木義登が語ります。ぜひご参加ください。

■開催日 八月三十日（土）

■開催方法 会場+オンライン配信同時開催
■場所 まるとしかく
徳島県美馬市脇町猪尻庄一〇〇

■参加費 一六五〇円

お申し込みはこちら ▼▼▼



文学イベント多数開催しています

徳島文学協会では、文学イベントを多数開催しています。今年三月には、詩人の清水恵子さんを講師にお迎えして、「現代詩講座」を開催しました。協会会員で俳人のうっかりさんによる報告記をお届けします。

今後様々なイベントを開催する予定です。皆さまぜひお気軽にご参加ください。

冷静に書く

うっかり

実家の飼い猫のランが急に衰弱し始め、それから一か月も経たずに死んでしまった。当日は有給を取って実家に帰り、ランの前でただ泣くばかりだった。翌日も翌週も仕事中でも思い出し

ては涙が止まらなかった。
普段詠んでいる俳句もランのことばかりになったが、人に見せられるような句でもなく、ほとんどは消した。ただ、詠む時に必要な冷静さがなんとか私を支えていた。あの気持ちに相応しい季語は何か、十七音に収めるためにはどこを削るべきかと考えながら、新たに句をひとつ、またひとつと重ねた。

ランを失ってから一か月経つと、五十句と二十句の連作が出来ていた。ランのことを想いながら詠んでいたが、連作二つ合わせても「猫」という言葉は三回ほどしか出てこない上に「ラン」という名前に至っては出てこない。いまだ推敲過程ではあるが、「猫」とすら書かなくてもいいのではないかと悩んでいる。ランという名の猫が死んだというこの私的な悲しみは読者には関係

がないからだ。その冷たいまでの冷静さは、書く上では大切だと思っている。

二〇一八年に徳島新聞紙上で佐々木会長による小説の書き方講座が五回にわたって掲載された。今回受講した清水恵子先生の現代詩講座では、それが資料として使用され「これは詩でも同じ。これもそう」と小説と現代詩を書く際に気をつけるべきことに、共通点がいくつもあると教えてくださった。一番大切だと思ったのは作品と向き合う時の緊張感、冷静さだ。これは書くこと全般に言えるのだろう。佐々木会長からも何度も聞いたように思う。

今回の二編の俳句連作は数日で詠んだが、推敲には終わりが見えない。しかしその推敲の過程でランの死を受け入れることができた。それは小説の書き方を学んだからであり、そして今回それを総復習するような形で現代詩講座を受けられたからだ。小説でも現代詩でも大切なのであれば、俳句でも同じではないだろうか。

俳句の師である西池冬扇が言っていた言葉をふと思い出した。「続けていれば俳句が寄り添ってくれる」今、まさにそうだと思う。

『徳島文学 Volume 9』

二〇二六年初夏、発行。

徳島文学協会発行の文芸誌『徳島文学 Volume 9』の原稿を募集します。

徳島文学協会では、年一回文芸誌を発行しています。地方の文芸誌としては類を見ない商業雑誌に匹敵するクオリティの雑誌を目指します。会員の皆さまの優秀作品を無料で掲載いたします。皆さまの傑作をお待ちしています。

◆応募資格

徳島文学協会会員限定

◆応募方法

全作品**メールにて受付**

縦書きを原則とする。テキスト形式 (.txt) か、Microsoft Word (.doc, .docx) のデータをメール添付で左記アドレスに送付。

publication@t-bungaku.com

メールアドレスに「徳島文学 9号応募作品」と記載

◆締め切り

二〇二六年一月十日(土)

詳しい募集要項は「徳島文学 2025 Volume8」の一九三ページをご覧ください。

◆原稿規定

■コラム

二〇文字×六六行以内
(タイトル・著者名を除く)、テーマ不問

■一般文芸作品

小説・評論・随筆・詩・短歌・俳句など広義の文学作品、および書評などの未発表作品

◆お問い合わせ

徳島文学協会事務局／
徳島文学制作実行委員会
電話 080-6284-0296
(日曜祝日を除く 九時～十七時)

原稿データの作り方 【表記方法について】

表記方法については標準的な体裁があります。徳島文学協会が発行する『徳島文学』や『と』では基本的に、小説やエッセイ、コラム等の原稿はこの体裁に準じて校正を行なっています。

投稿の際にはこの体裁に準じて、データを作成してください。

- 数字は漢数字を使用
- 感嘆符・疑問符！の後は全角アキ
- リーダーとケイについては「・・・」や「―」ではなく「二分」「……」「――」とする

2024年度

徳島文学協会会計報告

(2024年4月1日～2025年3月31日)

繰越金	1,060,049円
収入総計	1,868,341円
支出総計	-1,920,286円
差引残高 (次年度繰越金)	1,008,104円

文学イベント「私のイチオシ本」を

開催しました

一人一冊お気に入りの小説や漫画などを持ち寄って、作品の魅力をプレゼンするイベント「私のイチオシ本」を二月二十三日に開催しました。プレゼン後の投票で、富士野賢太さんの紹介した高野秀行・清水克行著「世界の辺境とハードボイルド室町時代」が最も読んでみたい本一位に選ばれました。富士野さんによる同書の書評を掲載します。

新米より古米を好む

人々の物語

富士野 賢太

本書は、中世日本史の専門家である清水克行氏と、アジア・アフリカの辺境を巡るノンフィクション作家の高野秀行氏による対談本である。日本の中世と現代の辺境という、時代も場所も異なる世界だが、その二つを比較することで意外な共通点が次々と見えてくる。

日本の中世は、現代人から見ても非常に解像度の低い時代だ。様々な創作で馴染みがある江戸時代などは異なり、中世社会の実像はイメージしにくく、社会背景もしつくりこない、という感覚を持った方もおられるのではないだろうか。

その要因として様々な点が考えられるが、特に挙げておきたいのが、現代社会からは想像もつかない過酷な社会において、人々は我々とは異なる価値基準

を有していたということだ。

中世日本や現代の辺境において育まれた価値観について、本書に登場する興味深い実例を取り挙げたい。清水氏によると、中世では新米より古米の価格が一・二倍から一・三倍ほど高かったのだという。この価格差の原因を探る先行研究はなく、独自に調べたところ、東南アジアやインドなどでは今でも中世日本と同様古米の方が高いということを知り、「古米は炊くと増えるから」という仮説を立てる。水分を多く吸う古米は新米よりも分量が多くなるのだが、その比率は価格比とほぼ一致するという。中世日本も現代の辺境も、常に飢餓のリスクを抱えて生きていかねばならない社会だ。腹を満たせるかどうかが至上命題の社会では、現代日本で話題となっている備蓄米の品質に係る議論とは真逆のベクトルの価値観が生きているのである。

本書がよくある比較文明論と一線を画しているのは、対談の

生々しさだ。豊富な実例を交えて中世の一般民衆の生活慣習を語る清水氏や、辺境で現地人とともに過ごしてきた高野氏の対談では、過酷な環境でもタフに生きる人々の営みが垣間見える。自前の通貨を作ることにあきらめ、中国から銭を輸入していた中世日本の金融事情と、ソマリア内戦で政府や中央銀行が消滅した後も独自に流通している通貨「ソマリア・シリング」を比較しつつ、高野氏の市場での体験談に関する箇所を読んでいると、「お金は国が発行して価値を保証するもの」という我々の常識や固定観念が崩れていくのが分かる。

対談において登場する「ここ」ではない別の世界を見ると、世界を認識する視野が拡張されていくような読後感を味わえる。今生きているこの社会がすべてではないことを再確認できるのだ。

本書のタイトルは、言うまでもなく村上春樹氏の小説『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』のパロディだ。初見では内容が想像できない異形のタイトルは、読了後に見直すと思議としつくりくる。「ここ」とは違う世界で展開されるハードボイルドな人々の物語を、ぜひ読んでみてほしい。

「エッセイ」
ただいま

与理原 奈那

書かなければ生きていけない。
さういふ運命のヒト、と

僕はてんでそんな才能のあるほうじゃなかったの、十年くらい前、小説を書く

のもアツサリやめちゃって、ギター抱えて都会へ出てみたのである。バンドマンというのに一度、なってみたくてネ。

とはいえ、大人になってから、二十半ばすぎてやりだしたものだから、いきなりテケテケ弾けるわけもなく。おまけにバンドなんかやりだした日には、皆さん中学からやってらして

キャリアアン十年、自分は初心者なものだから、とにかく何とかするしかなく、十年なんかあつというままだ

た。
十年やつて分かったのは、

「自分は音楽に向いていない」ということだった。前向きに考えれば、「文学の才能とかいうのはチョットだけ、あつたのかも」という

ことでもある。

なんせ、ギターは十人の先生に習い、車一台買えそうなくらいつぎこんだのに、

未だに弦交換も自分でできないんだからネ。裏拍とかキーがどうのとかも、まったく掴めなくてマイッタよ。

今では半分ほど諦めて、できないことはまわりの誰かに頼んでいる。

ものを書くことにおいては、十年ほど空白ができてしまったわけだけど、自分

自身もその間にいろいろ変わってしまったものだから、昔みたいなのはもう書けないだろうなア。代わりに、

若い頃とは違うものが、書けるようになっていくかもしれないナ。

「書かなければ生きていけない」とか、「書くことが自分の使命だ」とか気負わな

くても、今の自分をちよつとだけ、ここに刻んでいけたらいい。アレコレ手を出した末に結局「書くこと」

に戻ってきた僕は、顧みなかった糟糠の妻と久しぶりに暮らし始めるような、気

まずくも懐かしく、温かい気持ちに今、なっているのである。

【エッセイ】

八十年目にこんにちは

中村 純子

遮るもの何一つない平原の赤十字マークが中央についた白いテントを前に、丸眼鏡をかけ静謐で穏やかな感じのする軍服の上に白衣に身を包んだ青年というにはまだあまりにも若い同僚や看護師さんと、夫の実父の兄（長兄）が戦場で撮った写真、今年のまだ寒い真冬に、築六十年近く経つ家の解体工事を前に整理をしていた夫が見つけたきたものである。

祖母が信玄袋に入れて仏壇の引きだし奥深くに眠っていたのだらうという。モンゴルとロシアの国境線近くの戦場といえは村上春樹の『ねじまき鳥クロニクル』が有名だが、今年ただタイトルに引かれて読んだ長谷川四郎の『鶴』も同様の地区の戦場での出来事を描いた作品だ。

あの丸眼鏡をかけた青年も、その青年よりも大人びて、おそらく医療部隊の責任者だったのだろう武道を嗜んでいたかのようながっしりとした筋肉質の躰、この家の二つに分かれる顔のどちらも含んだ、いつも緊迫した表情を浮かべ写っている長兄と他の十五人前後の男女のその後を思う。

あの時彼らは何を思っ、写真に写り、それを家族へ送ってきたのだろう。凄惨な戦いを強いられたというにはあ

まりにも牧歌的な平原が映しだされ、今もそこに実在しているかのごとく胸に迫るのである。

長谷川四郎の作品群にも昼間の平原の穏やかさと、空の青さ、そこを自由に行き交う白い鶴、或いは国境線を越えた場で繰り広げられる平和な日常生活を営む戦争とは無縁な部落民たちなのか、兵士の前に顕れた白日夢なのか。長兄も未婚のまま戦場に軍医として送り出され、そのまま帰らぬ人となった時にはまだ二十代後半にさしかかったばかりだと聞いた。

残された母親の気持ち。最期まで切なるものとして長男の写真と忘れ形見が入っていた地味な色形の信玄袋に、ことばにならない無念さを思う。

戦後八十年目を迎える今年、ひょんなことからこの家のご先祖さまの一人・長兄の姿が、あの平原を自由に舞う鶴のように私の前にひらかれたのである。

【エッセイ】

無料の句会の掛け持ちは

お勧めしない

涼野 海音

コロナ禍を経て、多くのインターネット句会やズーム句会が開設されたようである。しかしながら、定員も会則もない無料の句会を掛け持ちすることとは、私はお勧めしない。その理由は

次の通りである。

一 無料の句会は、問題点の指摘が十分に行われていないことが多い。結果的に、句が放縦になるだけである（残念ながら、投句者自身がこのことに無自覚である場合が多い）

二 できた句を片っ端からどこかの句会に出句しているようでは、自選力がつかない。

三 二重出句のリスクが高まる（既発表句扱いになる句会を掛け持ちしている方ほど、二重出句のリスクが高くなることは言うまでもない）。

昨今の俳句ブームで、無料の句会を求める人たちが大勢いるようだが、それが「俳句の質」にマイナスに働いていないか、大変気がかりである。大方の句会が、会員集めのために無料にしているであって、それは点取りゲームを助長しているように思える。

また近年は年齢制限のある若手だけのインターネット句会やズーム句会があることも知っている。だが、このような句会では、たとえ句会費が無料でも、指導者不在のまま、最低限の問題点の指摘も行われていないようである（このような句会に参加しても、勉強になったという実感が乏しいことは、言うまでもない）。

【詩】

空の男

川名海至

なあ天使よ
俺には信仰がない
だから聖人にはなれない
せめて善人でいたい
だけど天使よ
もしよかつたら
俺に信仰をくれよ
生きるのは苦しい
苦しくてがいている
だから俺はからっぽじゃないけど
死ぬ時は
からっぽになって死にたい
でも今は嫌だ
からっぽになるには
一杯じゃなきゃいけないだろ
俺はまだ全然一杯じゃないんだ
天使よ
俺を信仰で満たしてくれ
苦しみも忘れるほどの信仰で
最期のときに返すから
手をつけないうままの
まっさらな信仰を返すから
な、俺は善人さ
そうだろう？

会員の皆さまの ご活躍

会員の皆さまが受賞された
文学賞をご紹介します。

文学賞を受賞された方は事
務局までご連絡ください。詳
細は「とと」六ページをご覧
ください。

第二十五回若山牧水青春短歌賞
大学生など及び一般部門

佳作 川島裕子

みんなの文芸誌『カクヲタノシム vol.5』 2026年秋発刊予定 原稿募集

みなさまの創作活動の発表の場としてお使いください。
ジャンル不問、どなたでもご参加で応募いただけます。

■参加掲載料

- ・詩 /1000円 四百字詰原稿用紙1枚程度
- ・俳句 /1000円 10句まで
- ・短歌 /1000円 10首まで
- ・小説、児童文学、エッセイ、コラム、書評など /3000円
四百字詰原稿用紙20枚まで(20枚以上は1枚追加ごとに+100円)

※お一人2ジャンルまで掲載 OK。

※非会員の方は、上記にプラス3000円でご参加いただけます。

■原稿締切 2026年5月31日

- ・メールにて word (テキスト) 形式の原稿データを添付。
 - ・件名に「カクヲタノシム応募作品」、メール本文に本名、会員番号、作品ジャンルを記載。
 - ・原稿にも筆者名(ペンネーム可)、作品ジャンル、作品タイトル、四百字詰原稿用紙換算枚数を記載。
- ※原稿が遅れる場合は、メールまたは電話でご予約ください。

たくさんの原稿をお待ちしています！



四国大学 第四回

瀬戸内寂聴青春

エッセイコンクール開催

徳島県出身で、数多くの小説やエッセイを残した作家・瀬戸内寂聴氏の文学的功績を後世に伝えるために創設された、四国大学「瀬戸内寂聴青春エッセイコンクール」が第四回目の開催を迎えます。

徳島文学協会はこの賞に協賛し、大賞作品を文芸雑誌『徳島文学』に掲載します。

詳細および応募用紙はこちらから

<https://www.shikoku-u.ac.jp/S-essay/04/>



四国大学 第六回

富士正晴全国高校生

文学賞開催

徳島が輩出した著名な作家・富士正晴を顕彰し、さらに新たな才能を発掘するため創設された四国大学「富士正晴全国高校生文学賞」は、今年で開催六回目を迎えます。

徳島文学協会はこの賞に協賛し、大賞受賞作品を『徳島文学』に掲載します。

詳細および応募用紙はこちらから

<https://www.shikoku-u.ac.jp/fmasahanu/06/>



掲載作品募集

会員の皆さまの積極的なご応募をお待ちしています。

ニューズレター「とと」

原稿はワード形式で事務局へお送りください。(送信時には件名に『とと掲載用』と入れてください)

- ◆エッセイ等 八百字以内
- ◆詩 四百字以内
- ◆短歌 三首以内
- ◆俳句 三句以内

「とと」は年二回発行ですが、一回につき掲載できるのは四作品程度です。先着順で掲載できない場合は次号に回します。

ホームページ「作品広場」

原稿はワード形式で事務局へお送りください。小説、エッセイ、評論、児童文学、詩、俳句、短歌などオリジナルの作品に限ります。

最新掲載作品

エッセイ

「はだかの心根」 喜多不二夫
作品、募集要項はホームページで
<https://www.tbungaku.com/plaza.html>



文学イベント案内

一部の講座に関して、非会員の皆様のご参加が可能になりました。
会場と Zoom 開催の両方で受付しているものもございます。
お申込みの際に、どちらでご参加するかお申し出ください。

徳島文学協会ホームページ
イベント情報



小説エキスパート講座

全国公募の文学賞で最終選考程度の実力のある方やプロの作家を目指している方。また、作品を提出した上で講師からの指名があった方を中心に、本格的なスパーリングを行います。参加のみはどなたでも可能です。

* 未完成作品の提出はご遠慮ください。

- 開催日 11月22日(土) 21時～22時
- 開催方法 『Zoom』による開催
- 参加費 作品提出: 会員3,000円／学生会員1,000円
参加のみ: 会員1,500円／学生会員500円
非会員2,500円 ※
- 提出作品 原稿用紙50～200枚
- 講師 作家・四国大学教授 佐々木義登
- 定員 10人程度
- 締切 開催日の10日前まで(先着順)

作品の提出方法

Microsoft Word ソフトで書かれた小説(400字詰め原稿用紙換算 50枚から 200枚程度)を事務局宛てにメール添付でお送りください。

短編小説講座

初心者から、短編小説の書き方を極めたい方まで、どなたでもご参加いただけます。参加者の作品を組上に載せて合評したり、プロの作品を取り上げ講師が講義を行ったりします。

* 未完成作品の提出はご遠慮ください。

- 開催日 10月18日(土) 19時～20時
- 開催方法 『Zoom』+会場 同時開催(ハイブリッド開催)
- 場所 徳島県立文学書道館
- 参加費 作品提出: 会員3,000円／学生会員1,000円
非会員 30枚程度7,000円
50枚程度10,000円 ※
参加のみ: 会員1,500円／学生会員500円
非会員2,500円 ※
- 提出作品 原稿用紙50枚位まで
- 講師 作家・四国大学教授 佐々木義登
- 定員 15人程度
- 締切 開催日の10日前まで(先着順)

作品の提出方法

Microsoft Word ソフトで書かれた小説(400字詰め原稿用紙換算 50枚程度まで)を事務局宛てにメール添付でお送りください。

※非会員の方のご参加について

ご参加希望の方は事務局までメールでお申込みください。

【ご参加の条件】

- ①Zoomの基本的な操作ができる(Zoom参加の場合)
- ②事前に参加費を支払う(振込手数料はご負担ください)

■講座参加費と作品提出料は、後日とりまとめた上、請求書と払込取扱票を年2回お送りいたします。

■Zoomでの参加方法がわからない方は、無料でサポートいたします。お気軽にお問い合わせください。

現代詩講座合評会

詩人の清水恵子さんを講師にお招きし、会員のみなさんの作品を合評形式で講評していただきます。

- 開催日 2026年1月24日(土) 14時～15時30分
- 開催方法 『Zoom』+会場 同時開催(ハイブリッド開催)
- 場所 徳島県立文学書道館
- 参加費 会員 1,000円／非会員(参加のみ) 1,500円※
- 講師 詩人・清水恵子
- 定員 15人程度
- 締切 開催日の10日前まで(先着順)

作品の提出方法

Microsoft Word ソフトで書かれた詩(縦書)を事務局宛てにメール添付でお送りください。先着で2名の方の作品が届き次第、締切ります。

エッセイ講座

どなたでも文章スキルを身につけることで、素敵な文章が書けるようになります。参加者の作品を組上に載せて合評しながら、人を惹きつけるようなエッセイの書き方をお伝えします。

- 開催日 12月27日(土) 19時～20時
- 開催方法 『Zoom』+会場 同時開催(ハイブリッド開催)
- 場所 徳島県立文学書道館
- 参加費 会員・非会員※ 1,500円
- 講師 作家・四国大学教授 佐々木義登
- 定員 15人程度
- 締切 開催日の10日前まで(先着順)

作品の提出方法

Microsoft Word ソフトで書かれたエッセイ(400字詰め原稿用紙換算 5枚程度)を事務局宛てにメール添付でお送りください。

徳島文学出版報告会

『徳島文学』第8号や、今後の協会の活動方針等について、会員向けの報告会を行います。

報告会終了後には「Book Book 交換会」を行います。

詳細▶



- 開催日 8月24日(日) 14時～(13時40分受付開始)
- 開催方法 『Zoom』+会場 同時開催(ハイブリッド開催)
- 場所 徳島市シビックセンター活動室3
- 参加費 無料

事前申込不要ですが、Zoom 参加の場合は URL をご案内する必要があります。そのため、事前に事務局までメールにてお申し込みください。

ご入会や講座のお申込み・お問合せは 徳島文学協会事務局まで

〒771-3201 徳島県名西郡神山町阿野字方子 103
TEL: 080-6284-0296 society@t-bungaku.com
<https://www.t-bungaku.com/>